

暴徒

—現代と秩父事件—

歴史と人間—近代化の問題—

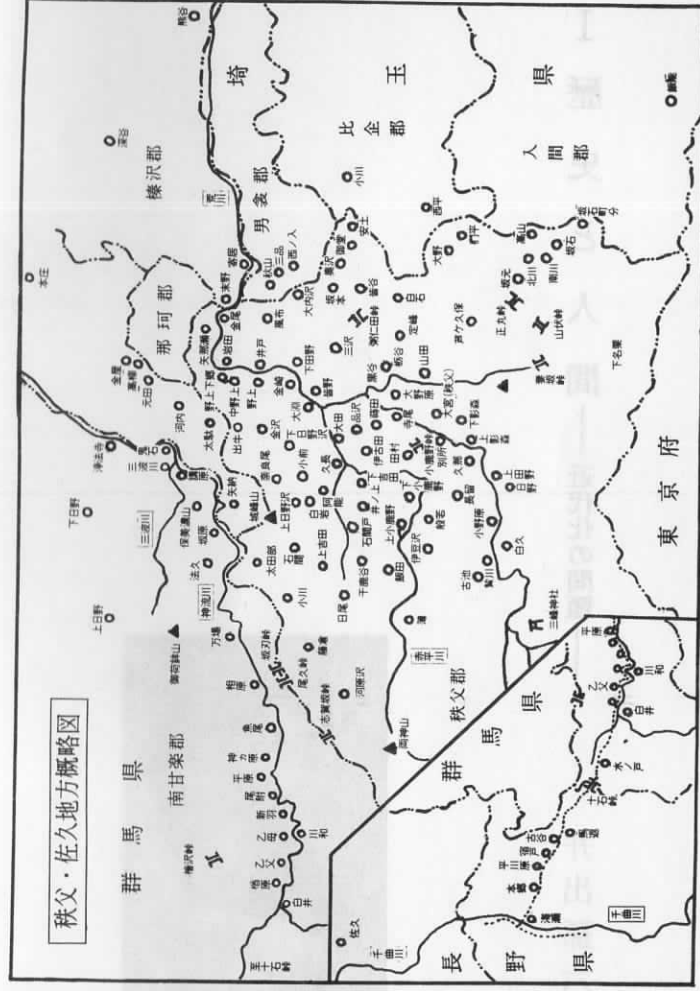
井田佳六

I 歴史と人間——近代化の問題——

井出孫六



井出孫六の肖像



# 一、犬も歩けば……

## 一 講演によせて

御紹介いただきました井出でございます。今、司会のご挨拶にもありましたように、今回の集まりは大変苦心をされて開かれたように思います。最近よく大学の学園祭のようなものがありまして、時々、私なんかも声をかけられるのですけれども、一週間か十日前くらいに電話がありまして、「実は学園祭であるけれども、来てくれないか」というようなことをいわれるのです。この間も埼玉大学の学生から電話があつて、確か十月十五日くらいだったと思ひますけれど、十月二十八日に学園祭があるので、そこで秩父事件の話をしてくれ、という。私は「来年の十月二十八日ですか」と訊きましたところ、「いや」と、大変困つた調子で、「実はこんどの二十八日でございます」といいます。

そういう話が多いのですが、同志社のこの集まりには、確か、四月か五月には電話をいただきまして、「十月二十八日の夕刻からあけて下さい」と、いうことでした。これは大変に稀有なことである、そういうことであるなら、勇躍馳せ参じたい、と申し上げたのですが、埼玉大学の学生には、「こと秩父事件に関して、十日前に計画を立てて、事が成れると思うのは、所詮、秩父事件を理解することはできないだろう」という苦言を呈したのであります。「来年の十月二十八日ならば、私は、埼玉大学は地元であるわけだから、参じましょう」と、そういうふうに申し上げたのです(笑)。

思い起こしてみると、昨年の今頃、私は、秩父の山の中にあつた一軒の空家を借りて住んでいました。最近特に過疎が著しいものですから、秩父にはこういった空家があります。その一軒を友人と二人で、一ヶ月七千五百円で借りまして、自炊生活を続けていたんです。毎日、秩父をほつつき歩いていたのですが、犬も歩けば棒に当たるということで、私のような無能な人間でも、そこに居着いて、うろろ歩きまわると、いくらか、珍らしいことが見つかるということを経験しました。

## 二 直木賞のこと

ところが、そういう生活がどうもできにくくなりました。というのは、今年の初めに佐藤栄作さんがノーベル賞をとって、変だなアと思っていたのですが、変だなア思っている間に、私も直木賞というものをいただきました(笑)。これも変だなア思つて、私の先輩の水上勉さんに、「そういうも

のを、いただいてもいいのであるか」と申しましたところ、水上さんは、「今までのペースを崩さないで、秩父に行きたい時には、一ヶ月か二ヶ月行つてもよろしい。そういうペースでやってゆくならば、もらつてもよかるう」といわれた。ところが一旦もらつちやいますと、なかなか一ヶ月通して秩父に行くなんてことはできなくて、この頃、たまに行くのですけれども、ほとんど日帰りとか、そういう形でしか時間を作れなくなつてしまつています。従つて、新しい事実を秩父で教えてもらう機会が無いものですから、今日お話しすることは、ホットな材料ではなくて、今日返書いて来たことを、かいつまんでもう一度復習する、というふうなことになると思つたのです。

なかなか本論に入らないのですが、実は、直木賞をいただくにあつて、私は今までに小説みたいなものを三つ程書いておりまして、それもまあ、百二、三十枚位のもんです。十年程前に、直木賞の候補というものに列せられて、今回は二度目だったわけです。最初の同期生は、思い出してみると、立原正秋、野坂昭如、五木寛之、結城昌治、谷川健一、というような方々と私の取り合わせでありました。谷川健一さんは、これは学究の徒で、柳田学を継承して、今盛んに業績を上げておられる方ですから、例外として。立原さん、五木さん、野坂さん、結城さんと、次々に直木賞をとつて、この十年間に、五木さんは二十巻の全集が出ておるし、野坂さんは、五十冊位の本が出ておるし、結城さんは朝日新聞社から堂々たる作品集が出ていて、みんなやつぱり、大変勤勉に業績を積み重ねておられる。

ひるがえつて私は、十年間に、百二十枚の短篇を三つしか書いてこなかったということです(笑)。

直木賞というのはご存知のように、直木三十五という大正から昭和の初めにかけて、精力的に大衆小説を書いた作家を記念するという事で設けられた賞でありまして、従ってそういう賞に値する人間というのは、大体、月に千二百枚位の原稿が書けなければならぬということのようです。で、直木賞というものを授かると、大体みなさん一千から千二百枚書かれます。それが一年間位そういうペースで巻き込まれていくというのが一般のようです。

千二百枚といいますが、日になおして四十枚です。たまにはこうして講演にも来るなど、毎日書いているわけでもないもので、そういうのを差し引きますと月に二十日位でしょうね。そうすると一日に六十枚書くわけです。

### 三 職業病

一日六十枚の原稿を書いていくと、生理的におかしくなります。大体、躁鬱の躁の状態でない六十枚は本当は書けない筈ですが、必ずしも皆躁鬱ではないわけですから、無理がどういふところへ来るかという点、まず腕が動かなくなつて、右肩が腫れてきます。書癪しゆじやくという病気ですが、そのうち右肩に瘤ができてきます。鍼を打つたり漢方などをやって治そうとするわけけれども、治らないですね。大体みんな直木賞をもらうと書癪になつて、肩に瘤があります。

私は十年間の間に、三百六十枚書いただけで、年になおすと三十六枚、日になおすわけにはいき

ません(笑)。で、水上さんは、今までのペースを崩さないでよろしいというようなサインを送つてくださったので、その言葉を拳拳服膺してやろうと思つたのですが、なかなかこれは大変なことのようであります(笑)。十年間の枚数を一ヶ月でこなさなければならぬというような運命になるわけ……。

そんなわけで、私は書癪にかかる心配はありませんが、そのかわりに、最近メニエル氏病というものにかかりました。メニエル氏病というのは、上を見ると天井が揺れたり、下を見ると床が持ち上がつて来るような症状を呈します。最初近くの町医者に診てもらつたのですが、原因がわからぬので、紹介をしてもらつて総合病院へ行き、内科へ行つて検査してもらつたのですが、わからなくて、耳鼻科へまわされ、そこでまたいろいろと検査をされて、やはりわからなくて、最後に精神科へまわされました。その時には、私は複雑な感慨を催しまして、ああこれでもう駄目か、と思うと同時に、私も天才と狂人の間くらいには、ちよつとなつたかな、というような気持ちになつたのであります(笑)。が、三時間の精密検査の結果、いやこれは天才の病気ではなく、非常に平常の人間がかりやすい病気である。年齢、四十四にもなると老眼になると同じように、耳が少し老化したのである、耳の中の三半器官が少し衰退をして、その結果、平衡感覚が鈍つてきたのだ、という診断でした。

しかし、私は、もちよつとちがう診断を自分でしております。学齢前の子供が、お祭りなんかありまして、親戚の人がいつぱい来たりすると、非常に興奮して、二、三日もそういう状態が続くと

自家中毒を起こして、吐いたり、ひきつけたりしますね。あれは幼児が状況に対応できないようなった時に、自家中毒をおこすわけで、私も今、自家中毒を起こしているのではないかと、自己診断をしているわけです(笑)。従って、本日の話も、右に揺れたり、左に揺れたり、定まらざることになると思うのですが、これも御了承いただきたく思います。

## 二、流れの中で

### 一 ユー・シャル・ダイ

実は、あまり本気で小説書きなどとは思っていなかったのが、小説書きにさせられたものですか、いろいろな方から、「君はいつごろから小説を書きたいと思うようになったのか」というようなことを、受賞の記者会見以来訊かれて、私もふりかえってみただけです。

実は、私が小説を書きたいと思い始めたのは、今四十四歳なのですが、十四歳の頃であると思っております。つまり、今から三十年前に、小説というものを書いてみたいな、と思ったのであります。直接に思ったのではなく、ふりかえってみると、その頃に小説を書くようになった根源のようなものがあるように思える、ということですが。

三十年前というと、ご存知のように、一九四五年、昭和二十年、という年ですが、その年の八月

十五日、いわゆる太平洋戦争の敗戦の日であります。そこまで遡っていきます。

当時私は中学校の二年でありまして、長野県の高原の、普通の中学校に通っていました。当時、中学校はどんな状況になっていたかというところ、旧制中学は五年返るわけですが、三、四、五年という上級生は、みんな名古屋の近郊の軍需工場に動員されておりました。ほとんど正規の工員が兵隊に取られてしまっているところを穴埋めする、という形で学徒動員され航空機製作工場に行っていたのです。従って中学には、私たち二年生と一年生の二学年しかいなかったのですが、昭和十九年の終わりぐらいいから授業はほとんどなく、農繁期には一週間の内、三、四日ぐらいいは勤労働員という形で、田植えをしたり、田の草取りをしたりするというわけ、授業らしい授業はなくなっていました。

私は中学二年の時教わった英語の、ひとつのセンテンスを鮮かに憶えておりますが、それは、助動詞 *will·shall* の使い方についてです。一人称の *shall* は話者の意志を表わす。つまり *will* に置き換えると *I will* になるということです。ひとつ文例を申し上げますと、*You shall die.* という言葉、これは *I will kill you.* あなたは死ぬでしょうではなくて、私はあなたを殺すであろう、という話者の意志を表わす、そういうことを中学二年の英語で習った記憶があるのです。

その時、英語の先生が、「近くアメリカ軍が、房総半島の九十九里浜のあたりに上陸するであろう、上陸するとかかなり短期間に関東平野は席卷されるであろう。その結果、日本国民は信州の山にたてこもるであろう。で、碓氷峠を越えてアメリカ軍が来た時には、諸君は “*You shall die.*” と叫ん

で竹槍を持って突っ込め」という形で英語を教わったのです。英語に例えていえば、そういう授業が行なわれていて、まともな授業というものは行なわれてはいなかったのです。

末期の昭和二十年春には、信州の佐久の高原に、立川から津上製作所というのが疎開して来ました。地下工場を造って、そこで徹底抗戦の為の飛行機を作るといいます。どこからともなく連れてこられた朝鮮人労働者にまじって、われわれ中学二年生も地下壕掘りに動員されました。

## 二 昭和二十年八月十五日

思い起こしてみると昭和二十年八月十五日という日は、本当に気持ちの悪いほど晴れた日でありまして、私は生涯の間に、あれだけ晴れた日本の空は見たことがないと思うほどです。八月十五日ですから、大変暑かっただろうと思うのです。

横道にそれますが、太宰治の小説に、「トカトントン」という題の短篇がありますが、これは八月十五日の正午の時間を短篇にまとめた非常に面白い作品ですから、お読みいただくといいです。まったく日本中に音が無くなった時です。その、音が無くなった瞬間を、「いや音はあった。トカトントンという大工の槌の音が、山の彼方から聞こえて来た」という仕組みの小説ですが、そこで鮮かに音が無くなった瞬間を、非常に象徴的に短篇にまとめ上げています。

音が無くなると同時に、日本中から煙が消えた瞬間であります。つまり、工場は一切停止しまし

て、煤煙というものが消えた。そのせいがあつたかどうか知りませんが、高原の空は気持ちの悪いくらい晴れておりました。三十四、五度の暑さであつたはずなのですが、私の記憶に残っている八月十五日というのは、温度がございません。



I-1 重大放送聴取を伝える当時の新聞（信濃毎日新聞・昭和20年8月15日）

実は夏休みを返上するような形で、われわれは動員されていたのですけれども、その日はあらかじめ、重大放送があるから登校せよ、という連絡がきていましたから、われわれは午前中から登校していました。田舎の中学校なので、かなり広い校庭があるのですが、この校庭は当時、ほとんどジャガイモとサツマイモとが植えられておりました。ですから、われわれの集まる場所が校庭にはない。自然、中庭に集まることになりました。中庭には奉安殿というのがあります。ご存知ではないでしょうが、小さいけれども大変立派な建て物です。厚い壁で造られております。つまり小さな土蔵と考えていただいています。火災があつた時に燃えてはならないということで、厚い壁で造られた小さな部屋なんです。その小さな部屋の中に、何が納められていたかということ、御真影と勅語とが納められていたわけです。

私が小さい頃教えられて、感銘を受けたものに、次のような話があります。久米正雄さんという小説家がありますが、この人のお父さんは、私たちの田舎の小学校の校長さんをしておりました。むろん明治の終わりの頃の話です。その小学校で火災が起こりまして、当時奉安殿が無かつたので、校長室に置かれていた勅語と御真影が焼けました。その結果、久米正雄さんのお父さんは、割腹して責任をとっております。当時、小・中学校の校長さんには、そういう責任がありました。つまり、学校が焼けても、御真影と勅語だけは取り出さなければなりません。どんな空襲の中でも、それは取り出さなければなりません。そういう義務があつたのです。

### 三 玉音放送



I-2 奉安殿

私たちは、その奉安殿のある中庭に集まりまして、そこで重大放送というものを聞いたのであります。重大放送は、わずか十分程度のものであつたと記憶しますが、前後にアナウンサー、それから解説者、NHKの会長の挨拶がありまして、従つて全部で三十七分五十秒かかっています。十二時から十二時三十七分五十秒まで





I-3 信濃毎日新聞・昭和20年8月16日

れわれは、その中庭で直立不動の姿勢で放送を聴きました。今申しましたように、三十四、五度の暑さですから、当時われわれは戦闘帽というのを被っていました。その戦闘帽のひさしから、タラタラと汗が流れていた筈です。ひるがえって考えてみると、私の記憶にある汗は、何かガラスのように、その額に凍りついているような感じで、私のイメージの中に残っております。

実は、われわれの中学は、県下でも有数の軍国主義教育が徹底した学校でありまして、当時、平泉澄という東京帝国大学の先生がおりましたが、非常に国粹的な国史学の教授ですが、この平泉教授の直弟子という人が、私たちの中学の校長さんでした。従って私たちの学校は、朝から晩まで軍国主義教育を施されておって、私もかなりの程度熱心な軍国少年でありました。

当時、その校長以下、中学校に残っている教師は十人位でありました。その十人位の教師は、こういう風というと失礼ですが、老人か、足の悪い方、あるいは片手が無い方か、あるいは胸に空洞のある方か、そういう方々でした。あとは兵隊に行っているか、名古屋の軍需工場へ、三年以上を引卒して行っておったか、という状況です。放送が終わって、教師の指示があったかというところ、いま思い起こしてみても、何の指示もなかったように思います。われわれは茫然として教室に戻った。戻ったわれわれはどうかというかと、教室の椅子に坐った記憶がありません。何か、腰がぐくだけて、北側の廊下に、みんな尻餅をつくように、すくだまって、そこで一時間くらいたむろしておったという記憶があります。

やがて先生が現われて、今日は皆帰ってよろしい、ということ帰ったらしい。その間、実は昼

の弁当を食った記憶がありません。当時は、弁当というのは、ほとんどイモか、またはコウリヤンの粉でできたパンといったところでしたが、そのような弁当をそのとき食べた記憶がない。つまり、それほど衝激を受けて、食欲も欠落していたということだろうと思うのです。

その日のことは、実は何分刻みでかなり精しく憶えております。考えてみますと、私の中で非常に奇妙な感じとなっております。その重大放送というのは、天皇自らの放送だったわけですね。その前にアナウンサーが解説をして、その後天皇の放送があつて、それを受けて解説者の解説等があつた、ということの中で、全体としてどういうことが起こったのかということとは分りましたけれども、天皇の放送を聴いたときには、何がなんだか、わけが分からなかった。ひとつには、大変に雑音が入りました。その前後の放送でわれわれが聴いたものには、あんなに雑音が入ったことはないので。というのは、毎晩のように、東部軍管区情報という空襲警報にわれわれは耳を傾けたものですが、いつも大変良く聞こえました。たまに夜、雷雨等で雑音が入りますが、昼間雑音が入

る筈がないのです。その正午のニュースは、すごい雑音が入りまして、それは物理の教室から持ち出して来た古いラジオが具合が悪かったのかな、と僕はその後ずつと思っていたわけです。ところが、東京へ出て、学生時代いろいろな人とその話をした時に、各地で全部雑音が入ったということです。従って、あれは何らかのかたちで、聴き取れぬような雑音を入れたのではないかと思うのですが、誰もまだ説明してくれておりません。

それからもうひとつ、それまで天皇は現人神と置いていたわけですから、つまり写真が焼けるだけで校長が切腹しなければならぬくらいですから、神様だと硬く信じていたわけです。それで、神様は声を出すのであるか。不埒なやつがおりまして、いや現人神もセックスをするぞ、という雑談を戦争中にすることがあります。その時、私は烈火のごとくに怒りまして、その友人を殴らんばかりにしてたしなめました。そういうふうには私は現人神のことを思っていました。その放送は、非常に分りにくい声であり、分りにくい日本語であった。現人神は、やっぱりマイクの前では喋らないだろう、従ってあれは代理の方ではないか、と私は思ったのです。代理にしては、もつと気の利いたやつを出すべきであると思ったのですが(笑)、まあそんな考えを抱きながら、その放送の意味は理解できませんでした。前後の解説でようやく分ったわけですね。

われわれは北側の廊下にへナへナと腰をおろして、あの放送は一体どういうことだったのだろうと話し合いながら、一時間くらい坐っておったわけです。これが、玉音放送を聴いた時の、私の印象です。

#### 四 十四歳の転向

その後、私は暫くの間、自分の立場を守りたいと、それまでのように軍国少年であり続けようと努力しました。懸命になって努力しました。一ヶ月くらいの間、軍国少年であり続けました。

町にただちにジープが入って来て、GIが来ました。飢えた子供に向かってチューインガムやキャンデーを投げてくれました。そういうキャンデーを欲しいと思いましたが、横目でらんで軽蔑した眼差しで拒否をした。それが一ヶ月くらい続いておりました。

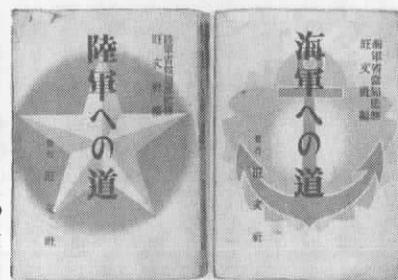
私が本当に日本が敗けたと思ったのは、敗戦から一ヶ月経ってからです。ある日、担任の教師が、墨と硯と筆を持ってこいと命令しました。今まで使っていた教科書をみな持って来なさいということでした。戦争が終わったということは、習字が復活することなのかと、最初思ったわけですが、次も、次の日、携えて行きました、その墨・硯・筆はまったく違うことに使われました。当時私はかなり優等生でしたから、教科書というのは丁寧に使いました。四月に買いますと、必ず古新聞を表紙にしまして、書き込みなど絶対にしちやいかんと思っていましたから、きれいなものでした。たまたま教科書を入れたカバンなどを跨いだりすると、私は誰も見ていないことを確認した上で、そのカバンに最敬礼をしてみよう、というようにことを冗談ではなしにやっておりました(笑)。教科書は、次の年の三月、一年間使った後、頁は手垢で黒くなっておりませんが、新聞紙を取りはず



I-5 国體明徴、帝國日本の世界的使命を説いている。

日かかりました。というのは、例えば使っていた国語の教科書は、二十章に分かれておつて、十三章消しました。助かったのは七章だけであります。国語に限らず、国史、西洋史、数学、理科、みないけない所がありました。それをいちいち指示通り墨で消したのであります。それから、われわれが使つておつた地図、これはサハリン、今の樺太ですね、あるいは千島、朝鮮半島、それらが皆赤色でした。つまり日本の領土だということ。満州が樺色クワンソウでした。植民地であるということで、本国に少し近い色で塗つてあつたという地図です。この地図は、全部提出をして没収されました。

最近、当時の同級生だった友人とあの時のことを話し合う機会があつて、改めてその地図帳のことを思い起こしました。友人は、その時悔やし涙を流したといいました。なぜかという、あの頃、教科書は無償ではありませんから、みな買ったのです。彼のお父さんは戦死されておりました。お母さんが、非常に苦勞をしながら一人息子を育てておつた。従つて教科書一冊買うにも、血の出るような思いをしているのに、その教科書を没収されたのです。そのことに、悔やし涙を流した、とこういっていました。



I-4 「軍は青少年諸君の総蹶起を何よりも待望している」と序にある。

してみますと、表紙だけは、四月に買ったのとほぼ同じような新しきで現われる、そのことに何か、今考えてみるとくだらんことですが、誇りをもつていたようだ。なぜならば、われわれの教科書には、青少年生徒に賜りたる勅語、あるいは大東亜戦争に関する詔勅等が載っております。そういう教科書を跨ぐことは、できないのです。

墨・硯・筆を持つて行つたその日、われわれが命じられたことは、「本日より、今までの教科書を使うことができない、という指令がGHQから来た。従つて新しい教科書に変えねばならないけれども、新しい教科書は今文部省で至急刷つているけれども、全国の中学校に届くまでには半年かかる」ということでした。その後半年経つて、われわれの手許に届いたのは新聞紙であります。新聞紙大に印刷され、いくつかに折られて頁も切らないで配達されたので、われわれは頁を切つて十六頁にし、二枚だったから三十二頁になり、千枚通しで綴じて、それを教科書として使つたわけです。それまでの空白の期間は、やむをえず従来従来の教科書を使つてよろしい、ただし、指示する個所については墨で消さねばならない、というわけです。

その日われわれは教科書に墨を塗りました。その作業に、ほとんど一

われわれにとつて、その日が真の敗戦の日だったように思います。その日をもって私は、ややオーバーにいうと、転向したのであります。つまり、軍国少年であり得ることができなくなつて、その日から、平和少年に転向したと思つております(笑)。

## 五 凌辱感—小説家への原点

生涯において、思想的転向をしたという経験が唯一度だけある、とこういうことです。

思想的転向ということは、個人に責任があるわけです。しかし、十四歳の少年にどういう責任があるのか、とかなり長いこと私は考えました。極端にいえば、その日から今日まで考えておるといふぐらいこだわつております。みなさんご承知のように戦争の責任というものは、連合軍の軍事裁判というものはあつたけれども、しかし、非常になし崩し的に、うやむやの形で忘れさせられて今日に至つていふ感じがします。

その時に転向をしたということは、別の言葉に翻訳すると、非常に恥かしいことであつたように思います。僕は情緒のない方でこまるのですが、そのいい方でしか、ちよつといいような面があるのです。いつてみれば、こう、精神的に犯されたというような気がします。十四歳の童貞でありますから。そういう、いわば凌辱感みたいなものがその時植え付けられて、それが何か私が小説を書きたいと思ひ始めたひとつの根源となつたような気がしています。

小説でなくともよいのです。凌辱感を拭きたいという気持ちであります。最初のうちは親父を憎みました。非常に短絡的に親父に責任があると考えました。あの戦争を起こしたのは親父の年代であると考えて以来、親父を虐待しました。しかし、我が凌辱感は拭えない。しからは、爺サマの世代であるかと考えてみたり、そういうふうにして、いろいろ考えたのですが、これまた未整理なまま申し上げますが、その後、凌辱感を重ね合せながら八月十五日を考えたのですけれども、私の中では二つの日付けが、あの一日の中にあるような感じが定着してきつつあるように思えます。つまり、昭和二十年八月十五日という日、これはあのいまわしき放送があつた時までであります。

## 六 ひとつの時代が終わつたと思つたが……

話は前後して恐縮ですが、その放送のあつた直後ですが、私の中学校の上を「赤とんぼ」が旋回しました。皆さんご存知ないと思いますが、「赤とんぼ」というのは真赤に塗られた練習機であります。木製で、大正時代に造られた、とても実戦には耐えられないので陸軍の練習機として使われておつた。その練習機が放送の一時間後、私たちの中学校の上空を、ものすごい轟音をたてて三回旋回しました。僕らは、そういう赤とんぼを近くで見るといふことは、当時ほとんどないので珍らしいものですから、庭に出て見てみました。校舎の棟スレスレに旋回して、その後、一直線にこの佐久高原をズツと突つ切りまして、私たちの中学校から真正面に浅間山を目がけて、一直線に

飛び去って行きました。最後は豆粒のように浅間山の山肌の中に消えて行った。

一体、どういうことだろうかと思っていました。翌日聞かされたところによると、その赤とんぼは、私たちが敬愛しておった、大変優秀な先輩が乗っていたのでした。陸軍航空学校に進んだのですが、その先輩が敗戦の報を聴くと同時に、練習機に乗って、郷里に戻って来て、そこで母校に別れるべく三回旋回して、自分の自宅の上も三回まわったそうですが、その後、浅間山の火口に自爆をしたという事件でした。

この自爆の事件を境にして、それ以前は、昭和二十年八月十五日であるという感じがします。飛行機を見送った後の、その日の午後は、何か一九四五年と呼ばれるようなものがないものとして残っております。一日のうちに、二つの年の刻みというようなものが凝縮してあるような気がします。そこで、先程申し上げた凌辱感のようなものに、現在に至ってもこだわっております。こだわっている間に、いつのまにか三十年の歳月が経ってしまったわけで、はなはだ具合が悪くなっておりますが、その凌辱感を遡っていったわけです。どういうわけかといいますと、あの昭和二十年八月十五日の昼をもって、ひとつの時代が終わったと、私はその後認識したわけです。これは後で、若干の訂正をしなければいけません、昭和二十年八月十五日の正午をもってひとつの時代が終わった。その時代はどういう時代であったかという点、いわば一八六八年、つまり明治元年、明治維新をもってスタートしたこの国の近代というものが、その正午で、ひとつ終った、と思ったわけでありませぬ。